

「神のパン」

ヨハネの福音書 6:16~45

1. 水上歩行のしるし

6:16 夕方になって、弟子たちは湖畔に降りて行った。

6:17 そして、舟に乗り込み、カペナウムのほうへ湖を渡っていた。すでに暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。

6:18 湖は吹きまくる強風に荒れ始めた。

6:19 こうして、四、五キロメートルほどこぎ出したころ、彼らは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、恐れた。

6:20 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」

6:21 それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。舟はほどなく目的の地に着いた。



これはイエシュアの「水上歩行」の奇蹟として有名な出来事です。水の上を歩くという、常識ではありえない記述が衝撃的で、その部分だけに目を留めてしまいがちですが、この奇蹟を交えた一連の流れが、神様のご計画を表す一つの型になっていると考えられます。まず時は「夕方」であったということです。ユダヤ人の日付は夕方が変わります。つまり夕方とは一日の始まりを意味します。「すでに暗くなっていた」とあるように、暗闇がすべてを包んでいました。暗闇の中の湖すなわち水、そして風、風はヘブル語でルーアハ(רוּחַ)で、「霊」とも訳せる言葉です。始まり、暗闇、水と霊、これらが同時に描かれている箇所が創世記にあります。

創世記

1:1 初めに、神が天と地を創造した。

1:2 地は茫漠として何もなかった。やみが大水の上であり、神の霊が水の上を動いていた。

1:3 神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

1:4 神は光を見て良しとされた。神は光とやみとを区別された。

天地創造の初めを想起させる意図がこの奇蹟の中にあると考えられます。そしてイエシュアは湖の上を歩かれることによって、創世記 1:2 の「水の上を動いていた」神様としての存在を示しておられると考えられます。

そして暗闇を照らす、神様の「光」としての存在をも表しておられると考えられます。「神は光を見て良しとされた」とあるように、イエシュアは御父である神様から承認され、遣わされた存在であり、その目的は「光とやみを区別」する、すなわちイエシュアを信じる者と、そうでない者とを区別する、分ける、すなわち裁くというご計画の最後を表しているとも考えられます。そしてイエシュアを「喜んで舟に迎えた」者たちは「目的の地に着く」すなわち神の国に入ることが表されていると考えられます。

また水の上を歩かれたイエシュアについてもう少し言及しますと、伝道者の書にこのような記述があります。

伝道者の書

11:1 あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。

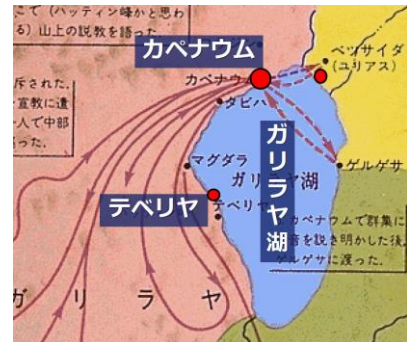
この言葉をイエシュアについての預言として捉えるならば、水の上のパンがイエシュアを示しており、ずっと後の日、すなわち終わりの日にイエシュアを見出す、出会う、イエシュアが「再臨」されることが表されていると考えられます。実はこのイエシュアの水上歩行の奇蹟の後が続くのは、「わたしはパンです」という、ご自分をパンにたとえたイエシュアについての証言です。モーセによって書かれた律法、モーセ五書がイエシュアについて記されたものであり、それが五つのパンにたとえられ、五千人の給食の奇蹟がなされました。そして水の上を歩かれたイエシュアが、水の上のパンにたとえられ、神様から与えられたパン、御父から遣わされたイエシュアについての証言が、ここから更に深みを増していきます。

2. 舟

6:22 その翌日、湖の向こう岸にいた群衆は、そこには小舟が一隻あっただけで、ほかにはなかったこと、また、その舟にイエスは弟子たちといっしょに乗れないで、弟子たちだけが行ったということに気づいた。

6:23 しかし、主が感謝をささげられてから、人々がパンを食べた場所の近くに、テベリヤから数隻の小舟が来た。

6:24 群衆は、イエスがそこにおられず、弟子たちもいないことを知ると、自分たちもその小舟に乗り込んで、イエスを探してカペナウムに来た。



ヨハネの福音書の描写は本当に奇妙です。なぜならこの箇所のように、そんなに詳細に記す必要があるのかと思えるような記述が多いのです。イエシュアも弟子たちも登場しない場面なのに、なぜこのように細かく状況を記す必要があるのでしょうか。ヨハネの福音書の最後である 21:25 でこのように述べられています。

ヨハネの福音書

21:25 イエスが行われたことは、ほかにもたくさんあるが、もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができまい、と私は思う。

つまりヨハネは、この福音書に記す内容を明らかに厳選して記しているのです。ですから何気ない描写とか、特に意味のない説明などありえないのです。記されているすべての描写が何かを指し示し、何等かのメッセージを持っていると考えるべきです。そう考えるならば、ここに記されている描写が指し示すものが何であるかを考える必要があります。

この状況を整理するならば、ユダヤ人の群衆が、イエシュアを捜し求めて、弟子たちの後を追ったということです。一隻の小舟を追って、彼らも舟で湖を渡りました。しかし弟子たちが乗った舟が、嵐の中でイエシュアを迎え入れたのに対し、ユダヤ人たちの舟は後からやって来た全く別の舟、つまりイエシュアを迎え入れるこ



とのなかった舟だということです。舟はヘブル語でオニー(אוני)と言いますが、全く同じ綴りでアニー(אני)という言葉があり、これは「私、自分」という意味です。それを暗示するかのように、先ほどの6:20で嵐の中で恐れる弟子たちに対して「わたし(アニー)だ」と語っておられます。つまりイエシュアを迎え入れた弟子たちの舟が、イエシュアを

私、自分の中に受け入れた、信じた者にたとえられ、ユダヤ人たちの乗った舟がそうでなかったこと、つまりイエシュアを信じなかった者にたとえられて描かれていると考えられます。これはヘブル語でしか理解できない表現です。

3. 神のわざ

6:25 そして湖の向こう側でイエスを見つけたとき、彼らはイエスに言った。「先生。いつここにおいでになりましたか。」

6:26 イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。」

イエシュアが言われるように、ユダヤ人たちは「五千人の給食」に表されたその意味を理解していない、つまりイエシュアが、モーセが書いた律法が指し示す方であることを、メシアであることを信じたわけではありませんでした。ただ自分の腹を満たすため、自分の利益のためだけにイエシュアに近づいて来たのです。たった五つのパンで五千人以上の人を満腹にさせる、なぜそんなことができるのか、なぜそんなことをされたのか、そんなことはどうでもいい、ただ自分が満たされればそれでいい、自分さえ良ければそれでいい、神様が何をなさそうとおられるのか、どんなご計画を持っておられるのか、そんなことは知らなくてもいい、そんな群衆の心理を、イエシュアは見抜かれました。

6:27 なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです。」

ユダヤ人の群衆は、今日食べるパンを、今という時代に生きるためだけに必要なもの、やがて老いて朽ち果てていくこの身体を守ることを求めています。しかしイエシュアが、神様がお与えになりたいのは永遠に朽ちることのない、なくなることのないいのちです。

6:28 すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」

6:29 イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」

ユダヤ人たちは、自分たちが神のわざを行えると誤解しています。神様のために何をすればまたパンをもらえるのか、そして永遠のいのちをもらえるのかと。しかしイエシュアは言われます。それは人のわざではない、人の力で勝ち取るものではない、神様が、その御意志によって人に与えるもの「神のわざ」であると。この世の人々は、自分の努力や働きで糧を得ています。しかし永遠のいのちは、そのような方法では手に入れることができません。では何をすればいいのか。「神が遣わした者、すなわちイエシュアを信じること」ただそれだけだとイエシュアは言われます。しかしその信じるということさえも、人が自分で信じたい、信じよう、信じようと思っ

ます。

4. マナ

6:30 そこで彼らはイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じるために、しるしとして何をさせていただきますか。どのようなことをなさいますか。」



6:31 私たちの父祖たちは荒野でマナを食べました。『彼は彼らに天からパンを与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」

ユダヤ人たちは、イエシュアがなされた「五千人の給食」の奇蹟と、モーセが荒野で40年間、イスラエルのために天からマナを与えた奇蹟を比較して、モーセの奇蹟の方が優れていると言っているのです。これよりももっとすごい奇蹟じゃないと信じられないということです。しかしマナを与えたのは本当にモーセ自身の力だったのでしょうか。それはモーセの奇蹟だったのでしょうか。

6:32 イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたわけではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。」

モーセではない、「わたしの父」が天からのパン、マナを与えたのだとイエシュアは言われました。しかしそれはあくまでもたとえ、型にすぎず、マナもまたあるものを指し示しているということです。

6:33 というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」

6:34 そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」

6:35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」

この描写は4:14からの「サマリヤの女」の記述とよく似ています。そこでは「いのちの水」にたとえられていたものが、ここでは「いのちのパン」に言い換えられています。

ヨハネ

4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

4:15 女はイエスに言った。「先生。私が渴くことがなく、もうここまでくみに来なくてもよいように、その水を私に下さい。」

聖書はこのように、同じ内容のメッセージを、言い換えて何度も何度も語っています。

6:36 しかし、あなたがたはわたしを見ながら信じようとしないと、わたしはあなたがたに言いました。しかし4章でサマリヤの女やその町の人々がイエシュアを信じたのに対し、このユダヤ人たちは信じないこ

とが示されています。サマリヤの女に対して、イエシュアはその素性を言い当てましたが、何かしるしを行ったわけではありませんでした。しかし彼女は、そしてサマリヤ人たちはイエシュアを信じたのです。一方ユダヤ人たちは、数々の奇蹟を見、五千人の給食という奇蹟を体験してもなお信じることはできませんでした。普通ならば逆の結果になるはずですが、しかしそうはならず、奇蹟を、しるしを見ないでサマリヤ人すなわち異邦人が信じ、それを見たにも関わらず信じないユダヤ人を通して 6:29 の「信じること、それが神のわざ」であり、決して人の力や思い、努力や働きで信じることはできない、全ては神様のご計画によることが示されています。

マナ(ἄρτος)はヘブル語で「何だこれは？」という意味です。見たことのないもの、知らないもの、理解できないもの、それがマナです。

出エジプト

16:15 イスラエル人はこれを見て、「これは何だろう」と互いに言った。彼らはそれが何か知らなかったからである。モーセは彼らに言った。「これは主があなたがたに食物として与えてくださったパンです。」

イエシュアが存在とその言葉は、このユダヤ人たちにとってまさにマナ、見たこと聞いたことのない、理解できない、信じられないものであったのです。

5. よみがえる

6:37 父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところに来る者を、わたしは決して捨てません。

6:38 わたしが天から下って来たのは、自分のところを行うためではなく、わたしを遣わした方のみところを行うためです。

神様を信じる者が「父が…お与えになる者」に言い換えられています。神様を信じる、人に信仰が与えられるというのは父なる「神様のわざ」以外の何ものでもないのです。私たちは神様を自分で信じているのではなく、信じさせていただいた、信じ続けることができるように造られているのです。ですからたとえしるしを見なくても、信じる者は信じるのです。そして信じる者は、父が息子のために花嫁を選び、そして与えるように、御父が御子イエシュアに与えられるのです。

6:39 わたしを遣わした方のみところは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしがひとりも失うことなく、ひとりひとりを終わりの日によみがえらせることです。

6:40 事実、わたしの父のみところは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。」

「ひとりひとりを終わりの日によみがえらせる」という言葉が二度繰り返されています。この二つの表現は、一見同じことを二度繰り返しているだけのようにも見えますが、よみがえらせる対象が少し違ってきます。まず 39 節「与えてくださった者」は、先ほど述べたように父が息子に花嫁を「与える」ような意味合いがあります。そして 40 節の表現との対比として考えるならば、この与えてくださった、よみがえらせる者は「子

を見ないで信じる者」と捉えることができます。子を見ないで信じる者とは、イエシュアの姿も、十字架も、復活も、そして再臨も、見ることなしに信じる者とされた、私たちイエシュアの花嫁なる教会を指していると考えられます。そして 40 節「子を見て信じる者」はイスラエル、ユダヤ人を指し示していると考えられます。イエシュアは人として、ユダヤ人の中に目で認められる形で現れ、わざを行われたからです。

そして「よみがえらせる」、復活はヘブル語でクーム(קום)「起きる、立つ」という言葉ですが、ヘブル文字に分けて見てみると、このような意味が出てきます。

コーフ(ק)…人の後頭部を象った文字で、巡る、還る、回復、希望、という意味があります。

ヴァーヴ(ו)…釘、鉤を象った文字で、下ろす、固定する、定める、という意味があります。

メーム(מ)…水を象った文字で、永遠、真理、という意味があります。

これら三つの文字の持つ意味を組み合わせると「回復し、永遠



に(その状態を)固定する」というメッセージが浮かび上がってきます。復活とは、ただ生き返ることではありません。私たちの肉体が、アダムとエバが罪を犯す以前の、造られた当時の状態、そのあるべき姿に回復し、その状態が永遠に固定される、保たれる、つまり老いることも、疲れることも、死ぬこともない状態であり続けることを意味しています。このよみがえり、クームという言葉は、神様のご計画の本質を一言で表すような重要な言葉です。それだけにこの言葉を受け入れられるか、信じられるかどうか、救いと滅びの大きな分かれ目となります。今日イエシュアを悪人呼ばわりする人はほとんどいません。イスラム教徒や仏教徒、無神論者でさえイエシュアを尊敬しています。しかしそのよみがえり、復活を信じる人は少ないのです。イエシュアを信じるとは、この「イエシュアが終わりの日に、信じる者たちをよみがえらせる」ことを信じることです。ですからイエシュアを信じない者は当然このよみがえりも信じられない、受け入れられないのです。ですからここでイエシュアが「よみがえり」という言葉を口にした途端、ユダヤ人たちの態度が一気に変わります。

6. つぶやく

6:41 ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から下って来たパンである」と言われたので、イエスについてつぶやいた。

6:42 彼らは言った。「あれはヨセフの子で、われわれはその父も母も知っている、そのイエスではないか。どうしていま彼は『わたしは天から下って来た』と言うのか。」

6:43 イエスは彼らに答えて言われた。「互いにつぶやくのはやめなさい。



「つぶやく」は、ヘブル語でルーン(לון)と言います。このルーンによく似た言葉にリーン(לוין)という「泊まる、夜を過ごす、とどまる」という意味の言葉があり、辞書によってはこの二つは同じ言葉として記されています。この言葉が聖書で最初に使われるのが創世記 19:2で、天から下って来た火によって滅ぼされた町ソドムに「とどまる」ことを意味しています

創世記

19:2 そして言った。「さあ、ご主人。どうか、あなたがたのしもべの家に立ち寄り、足を洗って、お泊まりください。そして、朝早く旅を続けてください。」すると彼らは言った。「いや、わたしたちは広場に泊まろう。」



つぶやくことがソドムにとどまることにたとえられ、その結末は天から下って来るパン、ではなく火によって滅ぼされるという言い換え表現によって、イエシュアに対してつぶやくこと、つまり信じないことによってもたらされる滅びが示されていると考えられます。

7. 完成

6:44 わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。

しかしここでユダヤ人たちがイエシュアに対してつぶやく、信じることができないのは、彼らのせいではありません。彼らが特段に愚かで、罪深いからではありません。今はまだ、父である神様が、彼らユダヤ人を「引き寄せて」おられないだけなのです。しかし終わりの日には、彼らをも引き寄せて、すなわち信じさせて、よみがえらせることが示されています。

6:45 預言者の書に、『そして、彼らはみな神によって教えられる』と書かれていますが、父から聞いて学んだ者はみな、わたしのところに来ます。

この引用はイザヤ書 54:13 からだとされています。

イザヤ書

54:13 あなたの子どもたちはみな、主の教えを受け、あなたの子どもたちには、豊かな平安がある。

文脈的にこれはイスラエル、ユダヤ人に対する預言です。豊かな「平安」シャーローム(שלום)は「繁栄、完全、完了」という神様のご計画の完成を意味する言葉です。神様に、イエシュアに対してユダヤ人たちはルー(ל)つぶやきました。しかしこのつぶやくという意味のルーを構成する三つの文字を見てみますと



ラーメド(ל)…杖を象った文字。学ぶ、習う、訓練するという意味があります。

ヴァーヴ(ו)…釘、鉤を象った文字。下ろす、固定する、定めるという意味があります。

ヌーン(נ)…魚を象った文字。規定、子孫、増加、という意味があります。

「子どもたちが学び、豊かになることが定められている」という先ほどのイザヤ書 54:13 の預言と同じメッセージが浮かび上がってきます。つまりユダヤ人のつぶやきが、終わ

りの日には「神のわざ」によって、神を学ぶ者、主を知る者に変えられる、ということがつづやく、ルーンという言葉の中に表されていると考えられます。

エレミヤ

31:33 彼らの時代の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうだ。——主の御告げ——わたしはわたしの律法を彼らの中に置き、彼らの心にこれを書きしるす。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

31:34 そのようにして、人々はもはや、『主を知れ』と言って、おのおの互いに教えない。それは、彼らが見な、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るからだ。——主の御告げ——わたしは彼らの咎を赦し、彼らの罪を二度と思い出さないからだ。」

今私はこのように皆さんに聖書のみことば、神様についてお伝えしていますが、神の国が完成した時には「神様のことはすべてイスラエル人に聞け」というようになります。神様に対してつづやく(ルーン)者が神様に永遠にとどまり(リーン)、熟知する者となる。まさにこれは人の手では決して成し得ない「神のわざ」と言えます。